

がっていない。

「的確なバイスタンダーの養成」を行うための効果的な普及活動について探ることを目的に、応急手当講習会参加者に講習終了後アンケート調査を実施したので、その結果に考察を加え報告する。

【アンケート調査等】

設問は、「受講者の参加意欲」、「講習実施後の修得度」、「バイスタンダーとしての意識付けの度合い」等9項目について行い、講習受講者718名から回答を得た。

【考察】

アンケートから把握された講習会の問題点等・講習会参加者の意欲、修得度の自己評価、バイスタンダーの意識付けは両講習会とも全く差がなかった。

・普通救命講習では、同講習受講経験者が29%あり、受講後の再講習についても、ほぼ全員が希望しており、積極性が見られた。

・講習指導員は、一般講習での実技修得に疑問を示し、普通救命講習の効果を感じていた。

効果的な普及活動についての対策

- ・普通救命講習の促進
- ・普通救命講習の広報の強化
- ・一般講習受講者に対する普通救命講習受講への動機付け
- ・一般講習の一定期間内連続受講のプログラム化とその格付け

4 救急搬送された関係者から見た救急隊員の接遇について

早川 信幸・五十嵐 修・佐藤 博之

長岡市消防署

【はじめに】救急業務の改善のため、救急要請する関係者の意識を探り、救急活動を円滑に行うための救急隊員の接遇について調査を行った。

【方法】平成14年8月から12月の5ヶ月の救急搬送の約5%を対象に、到着時の印象から搬送中の活動内容等について接遇面を中心にアンケート調査した。

【結果】期間中の2116件の救急出動中4.5%96

名へアンケートを郵送し、70名回収率73%から回答を得た。救急隊到着時の印象は良好であったが、処置の説明は約半数にしか伝わっておらず、関係者の救急隊員に対する印象は応急処置、病院選定、搬送の時間とともにやや低下していた。

【考察】救急活動では、①患者・関係者の理解度を確かめながらの活動 ②相手の要求の把握 ③必要な情報の収集 の観点から救急隊員の接遇が重要であり、平易な言葉づかい、適切な声掛け等による十分な説明を、活動隊員の誰もができるよう訓練しておく必要がある。

5 長岡赤十字病院における2002年度大規模災害発生時のシミュレーション

— 傷病者の所在の明確化と部門間の連携 —

八百板あい子・目黒 信子・小林 洋子

長岡赤十字病院救命救急センター

当院では多数の傷病者が来院した場合のシミュレーションを1998年より実施している。2001年度のシミュレーションでは、傷病者の氏名や所在が明らかにできなかつたり、手術に搬送した傷病者がまちがっていたりという混乱があった。

今回は、正確に傷病者の動向を捉える事ができるように、傷病者一覧ボードを作成し傷病者の所在の明確化と部門間の連携に効果を上げることができた。傷病者一覧用紙はあらかじめ作成されており、災害発生時にボードに張って使用する。CT・手術・入院棟など作成されたマグネット版がある。そのマグネットの移動で傷病者の所在と予定がわかる。

傷病者一覧ボードの活用結果として、中重傷エリア担当の看護師82%が傷病者の所在が確認できたと答えている。検査・放射線部門より、結果を届ける際、所在の確認ができ有効だったと評価された。傷病者の所在、手術・入院予定の病棟などが一目で確認でき、傷病者を中心に部門間での連携が取りやすかった。傷病者一覧ボードより傷病者がリスト作成され、安否調査などの問い合わせに対応できるようになった。

今後の課題としては、タグよりの氏名表示の

徹底、担当看護師、各部門、ボード担当職員がそれぞれの役割を十分に認識し、より正確で迅速に対応できる傷病者ボードとして活用していきたい。

II. 医師関連部門

1 現場救出に難渋し、ヘリコプター搬送後に救急室でレスキュー隊とともに救出活動を行った、耕耘機巻き込まれ事故による多発外傷の1例

田中 敏春・広瀬 保夫・宮島 衛
木下 秀則・飯沼 泰史・山崎 芳彦
新潟市民病院救命救急センター

症例は67歳の男性。農作業中に誤って耕耘機に体が巻きこまれた。救急車が要請されたが、耕耘機と患者とを引き離すことが困難であったため現場よりヘリコプターを要請した。受傷から3時間5分後に当院救命救急センターに搬送された。来院時、意識レベルは問いかけにうなづく程度で発語できず。呼吸は促迫、皮膚は冷汗著明で橈骨での脈は微弱でショック状態であった。当院救急外来でレスキュー隊とともに約1時間かけて耕耘機と患者とを引き離した後に、直ちに手術室に搬入し小腸損傷に対して切除術、右下肢開放骨折に対して洗浄、デブリードマン、開放性骨盤骨折に対して両側内腸骨動脈塞栓術（TAE）を施行した。術後、集中治療を行い徐々にではあるが全身状態は改善し一般病棟へ転室した。耕耘機、トラクター事故では、現場状況が救出に困難である場合が多く、今後迅速なヘリコプター出動の必要性が増してくると思われる。

2 経皮的心肺補助（PCPS）と肺動脈血栓吸引術により救命された重症肺塞栓症の1例

菖蒲川由郷・木下 秀則・宮島 衛
田中 敏晴・広瀬 保夫・飯沼 泰史
山崎 芳彦・山浦 正幸*・三井田 努*
小田 弘隆*

新潟市民病院救命救急センター
新潟市民病院循環器科*

〔症例〕患者：59歳，女性。

主訴：呼吸困難。

職業：料理店（立ち仕事中心）。

現病歴：2003年5月3日イベント参加（長距離歩行）。5月5日夕に胸痛出現したが自然に軽快。5月6日午前、台所で倒れていたところを夫が発見し救急要請。救急隊到着時JCS 3，チアノーゼ，頻呼吸，発汗著明で当院搬送。

現症：身長160cm，体重67kg，BMI 26.2，意識JCS 10，GCS 12（E3V4M5），体温36.3度，収縮期血圧52mmHg（触診），脈拍102bpm，呼吸数42bpm（促迫），SpO₂：84%，チアノーゼ著明，頸静脈怒張著明。

【検査】（血液ガス）pH7.300，PCO₂ 54.8 mmHg，PO₂ 11.4mmHg，HCO₃ 26.4mEq/l，BE - 0.8mEq/l。

胸部レントゲン：右横隔膜挙上。

心電図：特異的所見なし。

心エコー：右室負荷所見あり。

臨床経過：エコー所見から肺塞栓を疑い，診断の為に造影CTを行おうとしたところCT室で心停止となった。蘇生を行いながら救急外来でPCPSを導入。心臓カテーテル検査室で肺動脈血栓吸引術施行。ヘパリン静注，ウロキナーゼ静注を併用した。永久下大静脈フィルターを留置し，経過良好にて第28病日，独歩退院。

【まとめ】今回，私達は経皮的心肺補助（PCPS）と肺動脈血栓吸引術により心停止を来すほどの重症急性肺塞栓を救命した。